

蔡元培の「新年夢」について

吉 川 榮 一

蔡元培(1868～1940)は、1898年秋の戊戌政変の後、将来を嘱望されていた中央官僚の地位をなげうち、教育界に身を投じた。1901年、活動の場を郷里紹興から上海に移した蔡元培は、いくつかの学校の運営に関わりつつ、ロシアの中国進出に警鐘を鳴らすべく、日刊紙『俄事警聞』(「俄」とは俄羅斯=ロシアを指す)を1903年12月に創刊した。ここに紹介する「新年夢」は、『俄事警聞』の1904年2月17日すなわち光緒30年正月2日から同紙に連載された一種のユートピア小説である。ここには、蔡元培の思想の萌芽ともいえるものが見え隠れしている。あらすじは次の通り。

裕福な家に生まれた「中国一民」と号する一人の青年は、親の力に頼らず自ら働きつつ英・仏・独・露語をマスターし、世界各国を漫遊して三十数歳の時に帰国した。時あたかも大晦日、日本とロシアが中国人の土地で戦争を始めているというのに、人々はいつもと変わらぬ大晦日を慌だしく過ごしている。憤然と宿に戻った彼はそのまま横になった。

大きな鐘の音に跳び起きて、鐘の鳴る方に歩いて行くと大きな会場にたどり着き、彼は第一回代表会議議員の一人として会場に入っていた。彼は、壇上に立つ男が語る「新中国」の素晴らしい国家計画に耳を傾ける。

曰く、7歳から24歳まで教育を受け、48歳までそれぞれ自分に合った仕事に1日8時間従事し、退職後はのんびり過ごすことができる。中国軍の自覚を高め、各国が中国国内に設けた勢力範囲や租界を奪い返す。中国に敵対する国があっても、現在建造中の潜水艦や飛行艇によって敵艦隊を粉砕することができる……。

新しい国法に背いて私腹を肥やそうとする輩に対しては、裁判で嫌疑が確定するや、どこにしようとも電撃によってたちまち処刑される。この果断な措置に恐れをなして悪人はいなくなり、一年も経たないうちに国中が一つにまとまった。

中国一民自身は、第一回大会後まもなく、ロシアの反政府勢力に働きかけるためロシアに派遣され、その結果ロシアでは反政府勢力が勝利し、満洲も取り戻すことができた。人民の権利を最も重視するアメリカは新中国を直ちに承認したが、一部の国々は新中国に侵攻を開始した。しかし、中国側は挙国一致して情報を決して外に漏らさなかったのに対して、中国側は高級スパイを雇って敵情を熟知していたので、攻め込んできた敵軍をすべて撃退した。各国の中国における勢力範囲はすべて消滅し、中国を打ち負かすことができないと知ったヨーロッパの国々は、ロシアとアメリカの仲介で中国と講和条約を結ぶにいたった。ここにいたって、中国が「万

国公法裁判所」と「世界軍」の創設を提案すると、米露二国の力添えもあって、全ての国々がこれに従った。世界から戦争が消え、人々が豊かになって行くにつれ、文明は頂点に達した。姓名などはなくなり人は番号で呼ばれ、君臣や父子などといった名目はなくなり、子どもや老人は個々の家族が面倒を見るのではなく全て社会全体で養育されるようになり、男女は合意のもとに結ばれ夫婦という名称もなくなった。やがて犯罪者もいなくなり、法律や裁判所も廃止された。

中国国内の言語は新たな文字を使ったわかりやすいものに統一され、やがてその言語や新中国の豊かな社会のあり方はまずロシア、アメリカに受け入れられ、60年も経たないうちに世界中に広まっていった。かくして、世界大会が開催され、国境を廃し、無用の長物となった「万国公法裁判所」と「世界軍」も廃止することが決まった。世界一丸となって自然を制御し気候を安定させ、宇宙に植民地を建設することこそが地球人の目指すべき目標となった。この世界大会が開催されたとき、既に九十余歳になっていた中国一民が会場に向かおうとしていると、突然大きな鐘の音を聞き、彼は壮大な夢から覚めるのだった。

西暦1904年2月にこの「新年夢」を書いたとき、蔡元培は満36歳。その一年あまり前の1902年末、暴動を担う革命家を養成する愛国学社と暗殺者養成のための愛国女学を相次いで創設し、清朝打倒のための革命運動に従事し始めたばかりのころである。蔡元培はのちにアナキズムに傾倒するのであるが、この頃すでにアナキズムの影響が窺われ、身分制の廃止、夫婦の廃止、家制度の廃止などを理想社会を語る上でのキーワードとして使っていることは非常に興味深い。「口述伝略」になかで蔡元培は次のように述懐している：「このころ西洋社会主義者の、財産や婚姻を廃するという説がすでに中国に流入しており、余もまた深くこれを信じ、『俄事警聞』に掲載した小説『新年夢』においてこうした考えを示した」。

主人公・中国一民はロシアの反政府活動家に働きかけてロマノフ王朝転覆を実現させるのであるが、現実においても日露戦争前に明石元二郎がロシアで反政府勢力を支援する活動をおこなっていたわけであり、蔡元培の想像が歴史的事実と暗合している。また、国内情報の遮断とスパイの活用を説くあたり、今日の中国ともリンクするようで真に面白い。

それにしても、犯罪者を空からの電撃によりピンポイントで処刑するというアイデアは一体どこから生まれたのだろうか。また、1900年に初めてアメリカで就航したばかりだった潜水艦を主力とする艦隊と、同じ年ドイツでツェッペリン飛行船が初飛行に成功しただけでまだ軍用化されていなかった航空兵器を活用した軍事作戦の発想は、ユートピア小説とはいえ、先見の明があったといえるのではなかろうか。潜水艦や航空兵器が戦場に登場するのは十年あまり後の第一次世界大戦からであり、航空兵器が勝敗を決することが明らかになるのは第二次世界大戦なのであるから。

ちなみに、この小説が発表された同じ年の秋、蔡元培は号を「孑民」に改めている。「孑」とは「ひとり」の意。「中国一民」とはまさに蔡元培自身の分身であり、「新年夢」に描かれた世界こそ彼の理想の世界なのであった。(終)